5/25(土) おじ！倫々号です、特別号その④ どうぞご賞下さいませ。
幸せ運ぶアホー鳥

今週の倫理 ―特別号―その4

2020. 4.25 ～ 5.1

大ピンチを乗りきる

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

「人間はあるべきものになれる。『私にはできない』と言うとき、その人は欲していないのだ」
（ドイツの哲学者フィヒテの言葉）＊1

「世界は一蓮托生」と痛感したのは、二〇〇八年秋のリーマンショックのときでした。一枚の蓮の葉に乗る沢山の水滴のように、風を受けて葉が傾くと、水滴はみな一度に落下してしまいます。グローバリゼーションの危うさがそこにあるのです。

新型ウイルスによる感染症も、「一蓮托生」の世界で危機が増幅されます。各国各地でパニックが発生し、フェイクを含む情報が氾濫しています。いつ収束するのかわからず、IMFが予測したように、世界経済が大幅なマイナス成長に転じるのは間違いありません。＊2

先行きの不安は増大するばかりですが、すでにそうした事態を迎えてしまった以上、なんとか踏ん張り、智恵と力を結集して、逆境を乗り越えていくしかありません。

筆者は今月十六日に、石川県金沢市に本社工場のある株式会社「芝寿し」の梶谷晋弘会長と金沢市内でお目にかかる予定でした。梶谷氏は倫理研究所の理事にも就いておられるので、来年度のことなどで意見交換をしたかったのです。今回の感染拡大により、飲食業界は大打撃を受けているので、その実情も聞かせていただきたいと思っていました。しかし、都道府県間の往来に強い自粛が求められたため、やむなく延期を連絡し、メールも差し上げたのです。するとすぐに返信をいただき、その文面に感動しました。ご本人の了解を得ましたので、ここに引用し、披露させていただきます（前文は省略します）。

◇

コロナ感染の拡大は日増しに大きくなり、このままでは日本でもアメリカやヨーロッパのような足跡をたどるのではないかと危惧しております。

私の商いも創業以来の大打撃を受けています。すべての行事、会合、団体旅行等が中止となりイベントの弁当需要がほぼゼロになりました。

社会人となり半世紀経営の現場に携わり大小のピンチに遭遇しましたが、これほどの逆境に陥ったのははじめてです。

しかしおかげさまで「苦難福門」の真理に長年触れて参りましたので、目の前のピンチから目をそらすことなく、これを将来のビジネスモデル変革の絶好のチャンスだと捉え、将来ビジョンの再構築、企業基盤の強化、特に人材の育成に努めていくよう社長、幹部にお願いしております。

「店はお客様のためにあり」このような大ピンチに遭遇し、改めてこれまで支えていただいたお客様に今果たして何ができるのか、どのようなことをして差し上げるのが一番喜んでいただけるか、そこに焦点を当て現状の対応策を行っていきたいと思います。

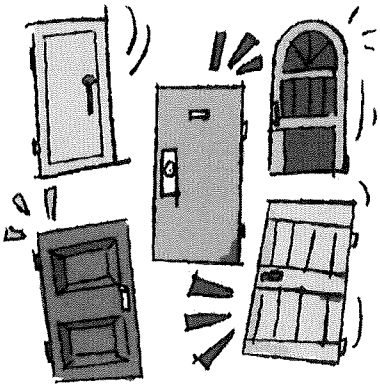
「万策尽きたと思うな。自ら断崖絶壁の淵に立て。その時はじめて新たなる風は必ず吹く」

パナソニックの創業者松下幸之助の言葉です。

たとえ一時たりとも被害者意識を持つことなく、常に当事者意識を持ってこの国難に前向きに取り組んでいきたいと思います。

◇

（次ページにつづく）



さすが「倫理経営」を長年に亘って実践されてきた経営者ならではの、凄味のあるメッセージではありませんか。勇気が湧いてきます。

会友の皆様におかれましては、このような非常時に直面し、日々の業務に忙殺されながらも寸暇を得て、「倫理経営」とはどういうものかを改めて見つめていただけないでしょうか。危機や苦境を乗り切る実践や心得を、そこに見出すこともできましょう。

そこで今回とくに強調したいのは、「捨てる実践」です。

倫理運動を興した丸山敏雄は、亡くなる一ヶ月ほど前に、「捨てる生活」という論文を執筆しました。そこには「ほんとうは人間は、物を得て幸福なのではなくて、これを捨てたとき、幸福である」と、世の中の常識とは反対の、まるで禅の老師が説いたような一文があります。よく考えてみれば、自分が「持っている」と思っているモノは、すべてが「自分のもの」ではありません。どんなに多額な財産も有り余る物品も死んだらあの世に持って行けず、この肉体ですら死ねば元素となって地球に戻る「借り物」にすぎません。なのに大半の人が「持つこと＝幸福」と思い込んでいます。だから「捨てる実践」が大事になるのです。

それには、何を捨てるのか（捨てる対象）と、いつ捨てるのか（捨てるとき）をわきまえることが肝要です。前者は大別すると、①物（お金を含む）、②生命、③「わがまま」な心、の三つになります。後者の捨てるときは、①苦難に遭遇したとき、②どうにもならない大窮地に陥ったとき、③平素から、の三つの場面となるでしょう。

とくに「捨てる実践」が偉力を発揮するのは、②のときです。すなわち、どうにもならない非常時に遭遇した場合にほかなりません。私どもが平素の学びで親しんでいる『万人幸福の栞』の第十二条に、そのことがはっきりと書かれています。しかし平常時にそれを読んでも、なかなか実感がわきません。

こうした一生に二度と出あうことのない大窮地に陥った時こそ、度胸の見せどころである。一切をなげうって、捨ててしまう。地位も、名誉も、財産も、生命も、このときどういう結果が生れるであろうか。

まことに思いもよらぬ好結果が、突如として現われる。いわゆる奇蹟というのは、こうした瞬間に起る、常識をはるかに超えた現象に名づけたものである。

進むも退くもどうにもならない切羽詰まった非常事態に陥ったならば、最も大切な自分の生命すら捨てる「覚悟」をする。人がそこまで「得たい」「持ちたい」という意識を捨てることに徹したとき、「天佑」を得て、予想外の好状況が打ちひらける。――そうした倫理実践の「奥の手」があることを、疫病による非常時がつづくなかに身を置きながら、噛みしめてください。

奇蹟（奇跡）は起きるのではなく、起こすのです。

（次号につづく）

＊1　ルドルフ・シュタイナー『シュタイナー〈からだの不思議〉を語る』（イザラ書房）22頁より引用

＊2　国際通貨基金（ＩＭＦ）は十四日に最新の世界経済見通し（ＷＥＯ）を発表。「大規模都市封鎖」を受けて約百年で最も深刻なリセッション（景気後退）に陥り、世界ＧＤＰは3％減に。感染が長引いたり再来すれば、景気回復はさらに予想を下回る恐れがあるとの認識を示しました。